

Malice @Doll

Malice@Doll III

Chapter 03

Perverted Organism

Version 2.0

原案・脚本 / 小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

99/10/19

登場人物

マリス Malice@Doll ドール

機械者たち Machineries

ジョー@アドミン Joe@Administrator 管理者

デヴォ@ルーコサイト Devo@Leukocyte..... 白血球 / 異物監視者
メリザ@パイパー Meliza@Piper..... 管工事者 / 笛吹
トッド@リペアラー Tod@Repairer..... 修理者 / 医師
フレディ@リッカー Fready@Licker 舐める者 / 清掃者

ドールズ

ドリス@ドール Doris@Doll..... ドールのリーダー格
ヘザー@ドール Heather@Doll..... メイド衣装の少女
アマンダ@ドール Ammanda@Doll..... アルビノの様な白肌
ミステイ@ドール Misty@Doll..... 褐色
エルザ@ドール Elza@Doll 半壊半裸ドール
チック@ソルダー Chic@Soder..... 半田 / 電気配線者

白い少女 Ghost Girl

ヴェゼル Vessel..... マリスを変異さすもの

見開かれたマリスの目

濡れた眼球。澄んだ瞳。

それはひたすら凝視し続ける。

快樂門／路地の間

うづくまり、頬をおさえているヘザー。

泣きはらした目は、今は虚ろに見開いているだけ。

ヘザー「——ねえ……、そうなの……？」

凝視するマリスの目。

快樂門／路地の間

ヘザー「（虚空を見上げ）——そうなの？ マリス……」

ヘザー、弱々しく笑う。

ヘザー「——あたし——、マリスみたいになりたい——、って、
ずっと思っていたのよ……。あたしがいつもマリスに
くまれ口を言っていたのは、マリスの声を聴きたかった
からだわ……」。

あたし、いつかはマリスみたいになれる、ってそう——
お願いをしていた——。誰に……？ そんな事、絶対な
いのに……。ずっとあたしはあたし……。躰が変になっ
ても——、あたしは——あたしでしか、ない……。 (悲し
み) ——マリス……」

見開かれたマリスの目

マリス「……」

ワークエリア

白い膚に赤黒く焼き印を押された、アマンダ——、

力無く笑っている。

アマンダ「は……、あは、あははは……はははははは」

そのアマンダの躰を、有機化したチックの半田溶接アームが抱きかかえる。

チックの躰は未だ完全に有機化したおらず、ぶるんぶるんと時折震えながら、蒸気を吹き上げる。

チック「——もつとなんだね？ もつと欲しいんだね？ アマン

ダ@ドール」

アマンダ「——（虚ろにチックを見つめる）」

しゅううう……。半田溶接アームの先が真っ赤になっ
なって——

シルエット。

アマンダ「ぎゃああああええええええっつ えっ えっ」

凝視するマリスの目

快樂門/メイン・アヴェニユー

機械とも生物ともつかぬ、哀れな姿となっているエルザが、ゆっくりと歩く。

しかし——、エルザ自身は嬉しそうだ。

その姿が哀れだなどと、自分自身では思ってもいない。今の姿こそが完全な姿なのだ。

エルザ「——マリス——、ありがとう……」

凝視するマリスの目

少しだけ、嫌悪の色が浮かぶ。

快樂の家

娼家の奥の部屋。

鎖の音が断続的に聞こえる。

暗い室内を仄かに照らす赤い灯。
部屋を埋めつくすかの如き、責め具の塊。
その中に――、ミステイの顔が浮かぶ。
有機化し、結合した責め具群の中に埋没し、苦悶の
表情を浮かべている。
ギリ　ギリギリギリ　ギリギリ
責め具が動く。ミステイは苦しむ。
しかし、それは彼女が感覚を得ている事の証。
そして、それを彼女は愉しんでいる。
ミステイ「――これまで――、あたしは痛がるフリをしていただ
け――。でも今は――、本当に痛みを感じる事が出来る
のよ……。マリス――」
生き物の様に床を這う鎖――。

凝視するマリスの目

一瞬目を逸らす――。が、再び目を見開く。

エレベータ・シャフト

闇に浮かぶ、ドリスの白い姿。

顔から下は薄暗くて判然としない。

ドリスの躰は不規則な律動をしている。

ドリス「――（愉悦）マリス……」

凝視するマリスの目

強張るマリスの視線。

エレベータ・シャフト

ドリス「見ているのでしょうか？　マリス。ちゃんと見て。あたし
の顔を見なさい」

ドリスの背後には巨大な者のシルエット。

ドリスの肩越しに覗く、有機化したデヴォ・ルーコサイトの顔。

背後からドリスを抱いている。

ドリス「――（吐息）――、そうよ、もつとちゃんと動きなさい。（背後のデヴォに）あなたの動きが、あたしの中に――あたしの――、躰の中に――、今まで感じた事の無い、――感じる？　こんな――知らなかったわマリス。そう……。見て……。あたしの顔を。あたしがどういう感覚を得られる様になったのか。あたしの顔を見れば判るでしょう？　マリス」

デヴォもまた、全身を震わせる程の快楽を得ている。機械音とも、呻きともつかぬ声を上げ、ドリスの頬に、ドリスの頸に顔を押しつける。

ドリス「ああ……」

目を閉じ、荒い吐息を漏らすドリス。

ドリス「――マリス……、あなたがしてくれた事よ」

凝視していたマリスの目

『違う！』と小さく顔を振るマリス――、目を閉じ耳を抑え――

マリス「こんな事を、あたし望んでなんかいない！」

そこは――、マリスの部屋。

部屋中に散らばる小さなマシナリーも有機化を始めているが、ザワザワと蠢くのみ。

その中央で、マリスは胎児の様に躰を丸めていた。

マリス「あたし――、あたしがこんな事を――」
クスクスクス……。

ごく微かに――、幼女の笑う声。

マリス「――」

目を開くマリス。

暗い部屋の奥に――、ぼうつと白く浮かんでいるのは――、あのボールを抱えた少女。

マリス「——だ、れ……」

幼女は微笑し、マリスを見つめている。
躰を起こすマリス。躰にまわりついたガラクタヤ
ケーブルが落ちる。

マリス「——」

再び奥を見ると——、そこには既に幼女の姿はない。
呆然と奥を見つめ続けるマリス。

快樂門

虚ろな顔で、中央通りを歩くマリス。
向こうを走り抜けていくのはエルザか、フレディか
——。

しかしマリスは気にも留めない。

歩きながら、マリスは、か細い声で唄を歌う。

今、マリスに出来る事は、それしかない。

へザー「（オフノ小声）マリス……」

歌うのを止め、見回すマリス。

マリス「へザー……？」

軒と軒の間の狭い路地にもたれ座り込んでいるへザ
ー。真っ白な顔を上げる事も出来ず、俯いている。

マリス、へザーに近づき、手を伸ばして顔を上げる。

マリス「！へザー……」

頬についた傷は醜い蚯蚓腫れとなっており、既に目
の光は失い視線は泳いでいる。

へザー「（微笑）あかし、止まっちゃうみたい……」

それは死相。マリスはそれを本能的に察知している。

マリス「止まる、って……」

へザー「全部止まって、しまうの。また、起こして、ね……、マ
リス」

マリス「へザー……」

へザー「また唄を歌っ、て……。そしたら……。また……」

へザー、マリスの手から滑り落ち、ガックリと床に

倒れ込む。

マリス「ヘザアアア！」

マリスの目から、涙が溢れだす。

口を抑え、立ち竦むマリス。

ジョー「（オフ）これが——、君が望んだ事だ」

ハッと振り向くマリス。

一人、未だマシナリーのままでいるジョー@アドミン。

マリス「違うわ！ あたしはこんな事を望んでいない！」

ジョー「君は考えていた。ドール、マシナリー、みんな永久にこのままでいたくない。同じ事を永遠に繰り返し、客のいないこの街を毎日、散歩をして歩く——」

マリス「違う！」

ジョー「どういう力、どういう存在が介在したか判らないが、君の願いは叶った。ここは永遠の世界ではなくなった」

マリス「あたしが——、あたしがこんな事を——」

肩を震わせ、嗚咽を漏らすマリス。

ジョーはそれをじつと見つめている。ジョーに表情はない。

マリス「——あたし、なの……？ あたしが……」

ジョー「——」

マリス「——違うわ……。あの小さな女の子が……」

顔を上げるマリス。

マリス「管理者のジョー！ あなたにはしなければならぬ事があるわ」

ジョー「——私の管理出来る場所では、ここはもうない」

マリス「あたしを変えたのは、この上の階層にいるわ」

ジョー「……」

マリス「ここにはいてはならない存在」

ジョー「——」

エレベータ

ジョーとマリス、上へ上がっていく。

途中、シャフトの中で、ドリスとデヴオが奇怪な姿で絡み合っているのが見える。

マリス「——」

ドリス、マリスの方を向いて——、艶然と笑む。
目を背けるマリス。

二人、黙っている。

ジョーはガラスの様な目で、じっとマリスを見つめている。

マリスは——、視線を落していたが——、ジョーを見上げ

マリス「——ジョー」

ジョー「……」

マリス「あたしに、キスして貰いたく、ない？」

ジョー「……」

上部階層

そこは——、古いホテルの廊下——の筈だった。

マリス「——（首を降り）違うわ……、ここじゃない」

無機的なガラソとした回廊。下層とは明らかに異なる光景。

ジョー「君が記憶しているデータをチェックしたくとも、君はもうそれを許さない躰になっている。だから私は君の言う事を事実だと認識する事は出来ない」

マリス「嘘なんかついてない！ あたしはここに来た！ でも、全然違う！」

マリス、駆けだす。

ジョー「マリス！」

マリスを追うジョー。

行けども行けども、そこは無機的な質感の回廊がぐるぐると巡るだけ。

マリス「（見回しながら）どこ…… あれはどこにあるの？」

くすくすくす……。

立ち止まるマリス。

マリス「!?」

いきなり、マリスの立ち止まるすぐ脇の壁に、薄暗い、そう、古いホテルの廊下が伸びている。

暗いランプの明かりが連なるその奥に——、白い少女が立っていた。

マリス「あの子……」

ジョーが来る。

ジョー「どうしたマリス」

マリス「ほら、あそこ」

ジョーのPOV

マリスが見ているのは——、ただの壁でしかない。

上部階層

マリス「——笑っている……。あたしを見て、笑っているわ」

ジョー「マリス、何の事を言っている。君はどこを見ているのだ」

マリス「……ほら、あそこよ!」

マリスは壁を指している。

ジョー「その先には何も無い」

マリス「見えないの……ほらあそこにいるじゃない!」

マリスは確かに、廊下の先に少女を見ている。

少女は微笑みかけ——、向こうに駆けだして視界から消える。

マリス「待って!」

マリス、追おうと手を伸ばし駆けだそうと——

マリス「!」

マリスの肩を、ジョーが抑える。

マリス「離して！」

ジョー「——」

マリス「（涙を浮かべ）離してよおおお！」

見つめ合うジョーとマリス。

ぐっ、ジョーがマリスを自己の顔に近づける。

マリス「……（息を呑む）」

ガラスの様な澄んだジョーの目がマリスのすぐ眼前に。

マリス「——ジョー……？」

ジョー「マリス、私にキスをしてくれないか」

マリス「え……」

ジョー「君が見ているものを、私は見たい。君が感じているものを、私も感じたい」

マリス「——だって……」

ジョー「キスをして欲しい、マリス」

マリス、逡巡する。

ジョーにキスをする事で、この世界にはまともなマ

シナリーは存在しなくなってしまうのだ。

マリス「いいの……？」

ジョー「……」

マリスを掴む手を緩めるジョー。

マリス、ジョーを見つめ唇を極く薄く開いて——

『出来ない！』とジョーを突き放し、マリス、背を

向け——

旧いホテルの廊下に向かって駆けだすマリス。

ジョー「マリス！」

壁が瞬時に微生物の集合の様に蠢き、マリスを包み込んで——、再び壁となってしまう。

ジョー「——」

旧いホテルの廊下

駆けてきたマリス——、歩調を緩め——、
マリス「——ごめんなさい……」

俯き、涙を拭うマリス。
ふと気づくと——、

そこはあの、舞踏室——ボールルームの前。

マリス「——」

ボールルーム

広いガラソとしたホール中央に、まだそれはあつた。ヴェゼル——、マリスを変異させたもの。

しかし、かつての様な動きはしていない。

肩鉄の様に、凝集されているだけ。

顔を強張らせ、その前にやってくるマリス。

マリス「——あなたはどこから来たの？」

ヴェゼルは答えない。

マリス「どうしてこんな事をしたのよ！」

マリス、徐々に顔と声に力を込めていく。

マリス「ジョーが言った事は本当なの……これはあたしが望んだ事なの……このオーガンを違うものに変えたいだなんてあたし、あたし望んでなんかいない！」

沈黙を続けるヴェゼル。

マリス「戻して！ 元に戻して！ 元に戻して！」

へザーを元に戻してよおおお……」

マリスの悲痛な声が、ボールルーム内に響く。

しかし——、それでもヴェゼルは答えようとしな

マリス、憤怒の顔となり——、ヴェゼルの外側に露

出している部位を掴んで引き剥がし始める。

ミシッ ギギッ

エレベータ・シャフト

髪を乱し、疲弊しきつた顔のドリ

ドリス「は——はあ……はあ……うっ……」

デヴォ「ドリス——コワレタカ……」

ドリス「——（苦笑）何言っているのよ。あたしはまだまだ満足なんてしてないわ。今までどれだけの長い間、つまらない躰でいたと思っているのよ」

デヴォ「——」

デヴォが促した先を見るドリス。

エレベーターが降りてきて——、ドリスの前に止まる。

中には、ジョー。

じつとドリスを見つめている。

ニヤニヤと笑みを浮かべていたドリス——、ふと怪訝な顔になる。

ドリス「——何？ 管理者のジョー」

ボールルーム

外装パーツがボロボロと崩されていくヴェゼル。

マリス「うっ——うっ！」

渾身の力で、壊し続けるマリス。

外れたパーツを思い切り叩きつける。

マリス「どうして！ どうして！！」

ガン！ ガン！ ガン！

ビシッ！

マリス「！」

折り畳まれたアームが崩れ落ち、外殻が一気に崩れ落ちる。

サツと後退るマリス。

外殻が崩れると、いびつな形のコアが露出する。

そのコアも、外殻と共に割れていた。

マリス「——」

ゆっくりと、再び近づいていくマリス。

コアの内側から、淡い光が覗いている。

マリス「——（恐怖）」

中に、誰かがいる。

マリス、それを見るのが恐ろしい。恐ろしいが、見なくてはならない。

小さく、荒い息を漏れ——、コアを覗き込む。

マリス「——？」

中には——、女がいた。

マシナリーではない。生きた、女。

白い裸身には、ほんのりと薔薇色の赤みが浮かぶ。

マリス「（『違う』と首を振る）」

そして——、その顔は——、マリスだ。

マリスが、そこで目を閉じ、胎児の様に臍を丸めて眠っている。

マリス「——あ……、あたし——、あたしは……」

神経症の様に小刻みに指を震わせながら、マリスは頭を覆う。

と——、中で眠っていた裸身のマリス——、小さく深呼吸をし——

裸身のマリス「——夢……」

マリス「——え……」

裸身のマリス「夢を見ていたの……」

裸身のマリス、目をゆっくりと開き、首をマリスの方に向ける。

強張るマリス。

裸身のマリス、コアの中で上半身を起こした。

マリス「——あたし——、夢……、夢なんか見ない、ドールは……」

裸身のマリス、じっとマリスを見つめていたが、自分の艶やかな膚に目を落す。

掌を広げ——

裸身のマリス「ドールは本当はこういう臍を持っている——」

マリス「——？」

裸身のマリス「そういう夢を見ていたの……」

マリス「——（ハツとなる）——そうよ——、見ていたわ、そういう夢を」

裸身のマリス「（目を細め、マリスを見る）」

マリス「硬くて、オイルを使わないと動けなくなってしまう躰、ぼんやりと何も感じる事もなく、ただ永遠にそこに居るだけの心——、そんなのが本当のドール、本当のあたしじゃない——、そういう夢よ」

裸身のマリス「——（微笑）」

徐々に、再び言葉に力がこもっていくマリス。

マリス「——でも、本当の事なんて、誰が決めるの？ 誰が判るの？」

裸身のマリス「本当の事は本当の事」

マリス「そういう姿になりたいってあたしは夢を見た。でも、それが本当のあたしの姿だなんて、誰が判るのよ！」

裸身のマリス、笑みが消える。

マリス「あたしは——、こんな姿でいる必要なんて、ない！」

ブン！ ぶんぶんぶん……

崩れたヴェゼルの外殻部が律動を始める。

ギギ ギギギギギ

落ちたアームが再び生き物の様に蠢き始めた。

ぼんやりとマリスを見つめているだけの、裸身のマリス。

ヴェゼルのパーツとシンクロし——、身を震わせ始めるマリス。

エレベータ・シャフトの最低部

殆ど漆黒の世界。

仄かに、遙か上部より差す光で、そこにあるものの姿が見える。

それは——、落ちてバラバラになった、デヴォの残骸。まだ僅かに、首を動かしているが、それが止まってしまうのも、そう先の事ではない。

ドリス「（遠いオフ）あああッ！」

シャフトの遙か上部——、途中で停止したままのエレベータ。

エレベータ

着物をはだけ、独り安心してぺたりと座り込んでいるドリス。

ドリス「——(クツ)」

ドリス、ケタケタと笑い始める。

エレベータ・シャフト

ドリス「(響くオフ) そうまでして、どうしてあのドールを救おうとするの? (嬌声) あなたは道化だわ! ジョー@アドミン!」

静寂——

ドリス「(遠くオフ) このあたしはこれからどうしたらいいのよ?」

ボールルーム

コアの中には、裸身のマリスはもういない。マリス、躰を震わせ——、身を屈めていく。と! マリスの背部から、次々と機械が突出していく!
周囲に散乱していたヴェゼル外殻の破片が浮いた。

旧いホテルの廊下

ギシ ギシ ギシ

スケアクロウの様な、細い脚は以前のまま。しかし上半身は有機化したジョーが歩いていく。向こうから聞こえる、破滅的な音。

ジョー「マリス——」

脚を早めるジョー。

ボールルーム

飛び込んでくるジョー、そこで起こっている事を見て目を見開く。

ジョー「何が――」

マリス「ギャアアアアアアアアアアアッ！」

ギャアアアアアアアアアアアッ！」

あまりの苦痛に悲鳴を上げるマリス。

その躰は異形のものへと変容していた。

外殻部がマリスの躰から突出した機械とメカニカルに結合していく。

ジョー「マリース……」

マリス、ハッとジョーを見る。

ガラスの様な、しかし今は、感情を有したジョーの目が、マリスを見つめている。

マリス「ジョー……」

マリスの目に、涙が浮かんだ。

マリス「ごめんなさ……」

ドオオオオオン！

全ての外殻部がマリスを包んだ。

その重みに崩れるマリス。

ジョー「――マリイイイイス！」

ジョー、駆け寄っていく。

しかし、異形の存在となったマリス、否、ヴェゼルはその接近を阻む。

ジョー「くっ」

ガコン ガコン ガコン……。

外殻機器は次々と降りた畳まり――、そのマスを小さくしていく。塊となって――、活動を停止した。

しゅっしゅっしゅっ……

静寂。

立ち竦む、ジョー。

そこにあるのは――、最初にマリスが見た時の、ヴェゼルそのもの。

ジョー「――」

ジョー、その塊に近づいて——、跪く。

ジョー「マリス——。君と同じものを見たかったんだ……」

ジョー、機械の塊に口づけする。

ヴェゼルとなったマリスを抱く様に、そこにうずくまって動かないジョー——。

溶暗

黒味

マリス「（オフ）——夢を、みていたの……」

ボールルーム

静寂の中に、存在しているヴェゼル。

今は動いている。

外殻の各部が動いたり、明滅したり、回転したりしている——。

ジョーの姿はそこにはもうない。

それはそうだ。あれからどれだけの時間が過ぎたのか。

否、それとも——

コッソ……。

ホールに響く、足音。

誰かが入ってきた。

ヴェゼルは動かない。

近づいてくる足音。

それは——

マリス。ドールの、マリス。

調子が悪いらしく、歩き方がおかしい。

マリス「——あなたはリペアラ……？ そうじゃないわね。前に会った時はそんな姿じゃなかったもの。もつとも、あたしのメモリーもおかしくなってしまうているかもしれない」

答える代わりに、ハム音をやや大きくする、ヴェゼ
ル。

溶暗

黒味

音（ノイズ）——

モゴモゴとした声。食器の鳴る音——、密やかな笑
い声。女の切なそうな吐息——。はつきりした言語
は聞こえない。そもそも人間のそれかどうかも判ら
ない程、それらが混濁したノイズとなっている。
その音が——、遠のく。

マリス「（オフ）——違う夢を、見たい……」

コアの中

裸身で、胎児の様に躰を丸めて眠るマリス。

夢を見ている顔。

マリス「（オフ）そう——、好きな夢を見るの——」

マリス、唇を僅かに震わせ——

目を、ゆっくりと——開ける。

ボールルーム

いつもの様に動作しているヴェゼル——、そのパー
ツが一つ一つ——、光の粒子になって蒸発していく。
眩い光が、ボールルームを満たす。

光へ拡散したヴェゼル——その中央に、マリスが立
つ。

否、それはもう、マリスという名前の存在ではない
のかもしれない。

ドールではない。

人の姿でもない。

美しい、と感じるのは、人の感性からなるものでしかないのかもしれない。

翼を広げ、マリスは飛び立つ。

快樂門（有機化前）

微かに聞こえる、マリスの歌声。

と、娼館から出てくるドリス達。

ドリス「またマリスの歌だわ」

え？ と見上げるヘザー。

ヘザー「マリス……？」

アマンダ「マリス——、って、誰なの？ ドリス」

ドリス「え……？（一瞬怪訝）何言ってるの。マリスは——マリスは歌よ。あの苛立たい歌声の事に決まっているじゃない！」

ミスティ「歌……」

最後に出てきたエルザ、見上げる。

エルザ「マリス……！」

快樂門の天井部を飛ぶ、マリス@エレメンタル（人工精霊）。

ドールたちの上を優雅に飛ぶマリス。

ヘザー、笑みを浮かべて、子どもらしくはしゃいでマリスを追う。

ヘザー「あはは、ははっ、あはははっ」

ドリス「何をしているのよヘザー！」

アマンダ「何を見ているの？ あの子」

エルザ「——マリス、よ……」

ミスティ「え……？」

ヘザーはくるくると周りながら、舞い飛ぶマリスに手を振る。

ヘザー「——（笑み）マリス、おはよう！ マリス！ こんにちは！ マリス、ごきげんよう！」

飛び去っていくマリス。

へザー「マリリス！」

マリスは快樂門から出ていく。

見送るへザー——、寂しそうに見つめている。

ワークエリア

デヴォ「グオオオオオ」

襲いかかるデヴォ！

ジョー「コマンドに従え！ デヴォ@ルーコサイト！」

構わずジョーに向かって鋭い爪を降り下ろすデヴォ！

ジョー、素早くそれから逃れ——、マントの下から鞭の様なワイヤー端末を射出！

デヴォの頭部に突き刺さる。

デヴォ「ギイイイイ！」

バチバチバチ！

激しい火花を散らし、デヴォの全身が痙攣を引き起こす。

ドオオオオオン！

崩れるデヴォの巨体。

人ではないジョー@アドミン、闘いの疲れなど、知る必要もない。

端末を格納し、デヴォに近づこうとすると——

ジョー「——！」

長いワークエリアの回廊の先から、白い姿が近づいてくる。

ジョー「——」

マリス、微笑みを浮かべ——、ジョーの眼前にふわりと舞い降りて——、

ジョー「マリ、ス……？」

マリス、ジョーに、サツと口づけ。

ジョー「！」

その一瞬は、刹那であり、永遠。

マリスの口づけ。

マリスが、本当にしたかった、口づけ――。

ジョーの躰をすり抜けるマリス。

ジョー、ハツとなって振り向く。

マリスの姿は虚空へ消えた。

エレベータ・シャフト

暗い縦孔を、マリスが昇っていく。

遙か、遙か上部の果てには――、光――。

End of Malice@Do11